

野外教育 丸投げでいいのか

浜名湖ボート事故で遺族提訴

記 西野 友章

浜松市の浜名湖で2010年6月、野外活動中のボートが転覆し、愛知県豊橋市章南中学校1年の私の娘西野花菜(当時12)が亡くなった事故から18日で丸2年が経ちました。私たちは今年5月学校を管理する豊橋市などを相手取り、損害賠償を求める民事訴訟を起こしました。引率した校長や教員らに野外教育の知識や経験もなく、外部の施設に丸投げした結果の事故でした。

学校の過失は

「こんな雨の中でボートをこぐのが教育なら、その意味は何なのですか」。私が提訴の前に記者に見せた出港前の生徒たちを写した写真。雨雲が空を覆い、湖面を大粒の雨が打っていました。ボートの前でレインコート姿の子どもたちが恐怖を押し殺すようにうつむく様子に言葉を失いました。

当日は大雨、強風、波浪注意報などが発令される荒天でした。国土交通省運輸安全委員会が1月にまとめた報告書は、授業の委託を受けた静岡県立三ヶ日青年の家の出航判断やえい航方法の誤りを指摘しましたが、学校側の過失には言及しませんでした。

「事故は委託先の施設が起こした。専門知識のない引率教員に過失はなく、市にも責任はない」。豊橋市の佐原光一市長や市幹部は事故後、一貫して教員や市に安全配慮義務はなかったと主張してきました。報告書はボートが転覆したメカニズムを専門家が科学的に分析したもので、事故の背景までは論じていません。

豊橋市教育委員会によると、野外授業を企画した章南中は、「生徒全員が力を合わせてオールをこぐと忍耐力やチームワークを養える」との他校の評判を聞き、事故の前年から三ヶ日青年の家の利用を始めました。

花菜ら生徒18人と教員2人が乗って転覆した船は、カッターと呼ばれる手こぎボートの一種。本来は水産系の高校や大学、自衛隊などで訓練や競技目的で使われます。今回の野外授業では体験する生徒はもちろん教師も初心者でした。青年の家の檀野清司所長も「教員も生徒も同じで、出港する直前に港内で30分間の操船指導を受けるだけだった。教員用に特別な訓練はなかった」と証言しています。

学校はツアー旅行に申し込むような気軽さで野外授業を企画し、有事の責任は知識のなさを理由に委託先の業者に押しつける。そんなことが通用するのでしょうか。

教員に知識必要

「子どもにも自然体験の素晴らしさを教える以前に、危機察知など教員に野外教育の知識がない。委託先に生徒を預け、所定の日程をこなせばいいという風潮が教育現場にあるのではないか」。信州大教育部長の平野吉直教授(野外教育)はこう言います。

文部科学省は子どもの「生きる力」を養うため野外教育を推進します。一方で教員への指導や体系的な倫理作りは遅れています。文科省によると、教員が大学の養成課程や、教員になってからも野外教育を学ぶ場は極めて少なく、豊橋市でも小中学校の教員対象に定期的な野外教育研修というものはありませんでした。

05年には千葉県立流山南高校の野外実習で女子生徒が乗ったカヌーが転覆し、死亡する事故が起きました。生徒の遺族が千葉県などを相手に民事訴訟を起こし、勝訴しました。千葉県教育庁の担当者は「委託先の選定を含め、学校が基本的な安全配慮を図る必要があった」と説明します。

私たちは、豊橋市が責任を認めて謝罪し、再発防止に努めることを求め続けてきました。私は「荒天が明らかなのに、なぜ責任者の校長は中止をしなかったのか。教員の危機

管理意識を高めなければまた同じ事故が起きる」と話しました。

病気の妻光美を気遣って医者になる夢を抱いていた花菜。その命は突然絶たれました。豊橋市は野外教育を企画する責任の重大さを自覚する必要があります。

「こんな雨の中、ボートをこぐ意味は何なのか」私の投げかけた問いは宙に浮いたままです。教員が実際に海や山に出て、野外教育の知識を身に付け、危機管理を学ぶことが必要でしょう。生徒を指導するのはそれからです。

【2012年6月17日中日新聞参照】



再発防止へ県教委

浜名湖ボート転覆 命日

6・18「安全確認の日」

記 西野 友章

浜松市北区の浜名湖で2010年6月、研修施設「静岡県三ヶ日青年の家」の手こぎボートが転覆し、愛知県豊橋市立章南中学校1年の私の娘西野花菜（当時12）が死亡した事故を受け、静岡県教委は花菜が亡くなった6月18日を「安全確認の日」と定めることを決めました。

当日は三ヶ日青年の家と観音寺少年自然の家（浜松市北区）、焼津少年の家（焼津市）、朝霧野外活動センター（富士宮市）の4カ所の県立青少年教育施設の所長らを集め、それぞれの安全対策の実施状況を確認し合いました。

県教委によると、安全確認の日は、事故を風化させず、再発防止に向け教育施設の安全管理を徹底するために設けました。午前10時半から1時間、三ヶ日青年の家で、各施設の所長らが安全管理マニュアルの見直しや救助訓練の実施状況、事故につながりそうな事例を報告し、情報を共有します。花菜の冥福を祈り、献花、黙とうをします。

事故は校外学習に来ていた章南中1年18人と教員2名が乗ったボートが転覆。花菜が水死しました。静岡県警が業務上過失致死で捜査しています。

【2012年6月14日中日新聞参照】



浜名湖転覆事故から2年

安全管理 不断の検証を

記 西野 友章

県立三ヶ日青年の家（浜松市北区）のボートが転覆し、豊橋市立章南中の女子生徒が死亡した事故から18日で2年になりました。この間、再発防止に向けた安全管理体制の構築は進みつつあります。振り返れば、当時の

安全管理は極めてずさんでした。事故を風化させることは許されません。関係機関には継続的な検証を求めたいです。

あまりにも問題点の多い事故でした。施設側が乗船者名簿を作成していなかったため、捜索・救助に手間取りました。航行不能になったボートを別のモーターボートで引つ張るえい航の経験もありませんでした。

気象注意報が発表された場合の訓練中止基準の規定はなく、施設運営を県から指定管理者に移行させる際の引き継ぎも不十分でした。いずれも、今年1月に国の運輸安全委員会が公表した報告書が指摘しています。

報告書には盛り込まれていませんが、学校側の対応のまずさも大きな要因でした。施設判断に追従し、荒天の中での訓練実施に疑問を挟みませんでした。事故発生直後の教職員への動きにも疑問が残ります。私たちの質問に対する豊橋市教委の回答書には、校長をはじめとする現場にいた教職員の狼狽ぶりにじんんでいます。

静岡県教委は4月、野外活動に臨む教職員向けのガイドをまとめました。「活動を推進する主体は学校であるという意識を常に持つ」と明記したことは、今回の事故を踏まえた前進だと思えます。校外の活動でも、親が直接子どもを託すのは学校です。安全管理が施設任せでは、親は安心して子どもを預けられません。

今回のような事故を二度と起こさないために、学校側と施設側の双方が生徒の安全確保に向けた万全の備えを構築し、チェック機能が幾重にも働く仕組みを求めたいです。常に自問して改良を重ねていく姿勢も必要です。

花菜の遺影はいつも、友人らが届けた花や絵画に囲まれています。事故の風化を恐れる私たちの声は切実です。「人事異動で人が替わった先、5年後、10年後も機能する仕組みでなければ意味がない」関係機関はおもく

受けとめてルールづくりを進めてほしいです。

【2012年6月16日静岡新聞参照】



カナちゃん 会いにいくよ

浜松ボート転覆 18日で2年
不登校の少女 追悼に学校へ

記 西野 友章

2010年、浜松市の浜名湖での野外活動授業で起きたボート転覆事故で、愛知県豊橋市立章南中学校1年の私の娘西野花菜(当時12)が亡くなってから18日で2年。この日、同校である追悼コンサートのため、不登校の少女(14)が1日だけ登校します。「カナちゃんに会いたい」

少女は小学校の6年間、花菜と同じクラスで、自宅を行き来する仲でした。交わした手紙は計50通以上。花菜は少女の片思いの恋への励ましや誕生日を祝うメッセージなどをつづりました。

「まずはしゃべることだね!もし、ハズカシくてムリ——××つてときは3人ではなそうよ!ファイト!ガンバレ!」

手紙をもらってなんか元気がでた!……!これからもウチらは双子ちゃんよ♡」

将来の夢も語り合いました。

花菜さんは漫画家、少女は保育士。「カナちゃんは大きくなったら子どもを預けると言ってくれました。私は漫画をかうねって約束

しました」

しかし、かないませんでした。10年6月18日、浜名湖で章南中の1年生18人と教師2人の乗った手こぎボートが、モーターボートえい航中に転覆しました。少女は花菜とは別のボートに乗船。湖面の波が高くなり、下船して避難していた時、花菜さんが戻らないことを知りました。

その年の秋、少女は同級生からいじめを受け始めたといえます。昨年6月から学校に行けなくなりました。

豊橋市は花菜の命日を「豊橋・学校いのちの日」と決めました。章南中では昨年もコンサートがありました。少女の母に付き添われて体育館の扉の外で聞きました。

今年のコンサートは「友と思い出を紡ぎたかった」をテーマに、花菜の写真100枚を舞台のスクリーンに映し、花菜の母親の光美の友人のピアニストや同校の吹奏楽部員らが演奏します。

少女は、母の隣の保護者席で聞くつもりです。「カナちゃんが生きていれば、いじめに遭った時きつと相談に乗ってくれると思う。絶対にいかなきゃ」

昨年7月から、愛知県田原市のフリースクールに週2日通っています。

「一緒に連れて行って」と花菜の両親から渡された遺品の猫のぬいぐるみをかばんにつけました。「フリースクールは楽しい」と聞くと間を置かずに「うん」とうなずきました。

【2012年6月16日朝日新聞夕刊参照】

